

夜汽車

尾崎放哉

青空文庫

「それで貴女あなたとう／＼離婚わかれてしまいましたので……丁度、昨年
の春の事で御座いました」

「まーとう／＼。ほんまに憎らしいのは其女あまの奴やつどすえなー、妾わたし
なら死んでも其家を動いてやりや致しやしませんで、」

あんまり今の女の声が高かつたので、思はずわれも其話しの方に
釣り込まれた。

我は少し用事があつたので神戸の伯母さんの家へ、暑中休暇に成
るとすぐから行つて居たのであつたが、つい／＼長くなつたので
有つた、処ちかが此間大坂の我家わがやから、もー学校の始まるのも近ちか
々／＼になつたのだから早く帰れと云ふて手紙が来たので仕方がな

く帰る事にしたで、今朝立つと云ふ処であつたのが、馴染になつた姪や、従妹に引とめられてしまつて、汽車に乗つたのはかれこれ晩の六時すぎでもあつたであらう、夜の故か乗客は割合に少ない、今朝手紙を出して置いたから家でも待つて居るであらう、此土産を弟に出してやつた時、どんなに喜ぶであらう、など、考えて腰かけて居る内に今の女の大声に破られたのであつた。

合憎われとは大分はなれて居たのでよくは分らぬが、年は廿七、八まだ三十には成るまい、不絶、點頭勝に、こちらに脊を向けて腰かけて居る、薄暗いランプの光に照されて透通るやうに白い襟足に乱れかゝつて居る後毛が何となくさびしげで、其根のがつくりした銀杏返しが時々慄へて居るのは泣いてゐるの

でもあるのか、これと向ひあいあいに腰かけてゐるのが今大声をだしたので、年は四十位に見えるが、其赤あから顔がほは酒を呑む証しるしなのであらう、見るから遅たくましそうな、そして其の袖口の赤ひのや、薄紅うすべにをさして居るのが一層ひときはいやらしく見える、が、一更いつこうすましたもので、其だるい京きやうなまり訛しやを大声で饒舌しやべつて居る、勿論絶たえず煙草たばこはすつて居るので。他の四五人の男の乗客は大概うつら／＼してゐる、やうである。

「それから貴女あなた神戸あなに腹更はらがほりの兄あなが一人御座まいますので、それに今では厄やつかい介かいになつて居るので御座まいます」

「第一貴女あなたが御ゆるいのどすえな、れつきとした女房で居やはつてな、そんな何処どこの馬の骨みだか牛の骨あま見たやうな女なんぼに、何程なんぼ

御亭主ごていしゆが御好ぢおすきや云ふたつて、自分じぶんから身を御引きやすと云ふ事が御ますか、ほんまに、……」

一人で怒をこつて、カン／＼と叩たく煙管きせるの音も前よりは烈はげしくをぼへた。

「そして又えらう心気しんきな御様子ごやうすでおますが、何処どこに御行おゆきやすのどすえ」

暫しして忍しのび音ねに語かたり出だしたのは銀杏返ぎんぎょうかへしの女である

「………どをせ貴女あなた………妾わたしは泣なきに生うまれて来きたやうなもので御座ざいます………それも妾わたしの不運ぶうんと存ぞんじては居ゐりますが………まだ一いしよで居ゐりました時に信太郎しんたろうと云ふ男の子が一人御座ざいましたので………丁度今年で六つで御座ざいます、………それを貴女あなた離嫁わかれる

折おりに置おいて行ゆけと申ましましたので、しかたなく置おいて歸かえつたので御座ごいます」

「まー御ごぼんさん迄まで御有ごりやしたので」と又横槍よこやりを入いれる、

「それが只ただ一つ心こころ残のこりで御座ごいましたので、返かえります折おりに隣となりりにそれはく親切しんせつな御婆おばさんが御座ごいましたしてそれに氣きを付つけてもらうやうにたのんで置おきました、私わたしが歸かえりました当座とをざは………毎まい日ひく私わたしを尋たずねて泣ないて居いたそうで御座ごいます………」

後毛ごむりのぶるくとふるえるのが見みえた。

「御無理ごむりはありまへん、」

赤良あから顔がほもしばし煙管きせるを置おいてかなし氣げに見みえた、噫あなん何なんと云いふ薄ふ

命うんをんなな女であらうと我われも同情の涙に絶たえなかつた、

「その御婆さんの処とこから今朝けさ、貴女あなた、信太郎が大病でむづかしいと云ふてよこしたので御座います……まー其時の私の心は……

……それで貴女、家うちに居た処で何事なにも手に付きはしませず、家うちにちよつとは一寸そこまできと云ふて置いて出て参まいたので御座います……」

「まーそれで、御可憐おかはいさうなは信太郎とやら云ふ御子おこどすえなー、
大方をゝかた其女そのあまに毎々をゝかたく、いぢめられて居いやはりなはつたでしや

ろ、妾わたしの家の隣うちとなりにも貴女継子あなたまゝこがありましてなー、ほんまに毎日ノ
たゝかれて泣なかぬ日はないのどすえ、」

「まーそれで御座ございますか、」

心しんぱい配はいそうに顔をあげて対手あいての赤良顔あからがほを眺ながめた、

あからがほ
赤良 顔はあー悪い言を云つたと云ふ風であつたが

「なに貴女あなたそれ程ほどでも有りますまいで……何でも聞いた程ほどではな
いものどす……そー御心配しやはると御子をこはんより貴女あなたの方が御
よはりどすえ」

と云つたものゝ猶氣なほの毒そうに眺めてゐた、

うす暗ひランプの光………彼女のすゝり泣く声………何
と云ふ薄命あはれな女であるかと我われは思はず溜息ためいきをついた、やがて汽
車は止とまつた、

「大坂」※ 「大坂」※

駅夫えきふの呼よびこ声へも何となく沈しずんで聞きこえた、もー八時近くである、

乗客も皆出た、われも出た、彼女も出てゐる、

「御心配しなはらんのが……」

赤良顔は京都に返ると見えて窓から顔を出して彼女と話しをしてゐる、

「はい有難う御座います」

やがて彼女は急ぎ足に歩んで行つた、赤良顔も窓から猶見送つてゐる、彼女はふりむいて點頭をした、われも思はず立つて彼女を見送つて居た、

「兄さん」

はつと思つて見ると弟である、今朝の手紙で下女と弟とがわれを迎ひに来て居たのであつた、

「あ、帰つたよ」「御土産もたんとあるよ」

やがて弟の手を引いて三人で家路についた。

どこどこへ行いつたか先さきの女をんなはもーそこらに見えぬ、

噫あゝあはれなる彼女、よ

神よ、あはれなる信太郎を救ひ給へ。思はず吾は天にいのつたのであつた。

終

青空文庫情報

底本：「尾崎放哉全句集」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年2月10日第1刷発行

入力：蔣龍

校正：成宮佐知子

2013年8月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜汽車

尾崎放哉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>